

## 松本清張の初期作品の社会性について

—『点と線』から『ある小官僚の抹殺』へ—

楊 華\*

### はじめに

松本清張は明治四十二年に北九州市小倉で生まれ、昭和二十六年、処女作『西郷札』が『週刊朝日』の「百万人の小説」の三等に入選、第二十五回直木賞候補となった。昭和二十七年、『ある「小倉日記」伝』を発表し、第二十八回芥川賞を受賞した。昭和三十二年『点と線』、『眼の壁』の発表によって、日本では爆発的な「清張ブーム」が起こった。この頃、松本清張は社会派推理小説家としての地位が確立された。「清張以後」という言葉があるように、松本清張の文壇登場以来、日本の推理小説の作風は大きく変わった。従来の探偵小説のトリック一辺倒に対して、松本清張は犯行の動機を重視し、それを取り巻く社会問題を追及している。清張以外、水上勉、森村誠一、黒岩重吾、有馬頼義などの作家たちも、「社会派推理小説」の作品を多数発表している。松本清張は昭和二十六年文壇に登場する頃から、平成四年に亡くなるまで四十年間の作家生活において、ミステリー、ノンフィクション、評伝、現代史、古代史など幅広い分野において、1000篇を超える作品を出している。

松本清張の初期作品の代表作『点と線』は昭和三十二年に発表された。戦後の昭和三十年代のはじめという時代は、高度成長のとは口にかかっていたころである。組織の力が大きくなり、その中で個人が次第に歯車化していく。清張

---

\* 中国・大連大学日本語文化学院 准教授  
日本・西南学院大学国際文化学部 客員研究員

はこういう権力悪という社会問題を自分の作品に取り込んだ。『点と線』において、清張は小官僚の課長補佐佐山という人物を設定し、彼の死亡をめぐり、ストーリーを展開した。このような戦後の組織の中の官僚にまつわる作品は、ほかに『ある小官僚の抹殺』（昭和三十三年）、『危険な斜面』（三十四年）、『三峽の章』（三十五年～三十六年）、『現代官僚論』（三十八年）、『中央流沙』（四十年）などが挙げられる。『点と線』は「社会派推理小説の記念碑的な作品」と従来から高く評価されているが、権力悪の暴露という面において、後の作品ほど十分ではないと考えられる。『点と線』の不徹底から後の作品における徹底的な暴露に発展していく過程に、昭和三十三年二月に発表された『ある小官僚の抹殺』が重要な役割を果たしている。『点と線』、『ある小官僚の抹殺』、両作品とも汚職事件の渦中にある小官僚の死に関する社会問題を扱う作品だが、それぞれのテキストから現れる「権力悪」への追及の程度が違う。したがって、本稿は、タイトル、構成、ジャンル、「社会悪」の暴露などにおいて、『点と線』から『ある小官僚の抹殺』への発展をめぐり、検討していきたいと思う。

## 1. 先行研究

松本清張は二十世紀の日本文壇における社会派作家として高く評価されている。彼の作品に日本の社会問題に対する批判がよく見られる。政治、経済、文化、日米関係など社会の各方面に清張は関心を持って、それらの暗黒面を暴露した。

日本において、松本清張に関する研究は作家論と作品論ともに行われている。ここでは、清張作品の「社会性」についての学者たちの指摘を抜粋する。

平野謙（1971年）は『点と線』の「解説」で、「しかも、私がひそかにクロフツより松本清張の方が新しいと思ったのは、犯行の動機づけをクロフツが

---

1) フリーマン・ウイリス・クロフツ (Freeman Wills Crofts 1879～1957) : アイルランド生まれのイギリスの推理作家。リアリズムを重視した一連の推理小説で知られる。(Wikipedia より)

つねに個人悪に限定しているのに対して、松本清張は個人悪と組織悪とのミックスしたものに拡大している点である<sup>2)</sup>と指摘している。中島河太郎（1972）は『松本清張全集11』「解説」で、「それから犯罪動機の重視がある。それは人間描写に通じるし、動機に社会性を加えれば、作品に幅や深みを増す<sup>3)</sup>と論じている。浅井清（1995）は「松本清張の魅力」で、「松本清張の文学にはこのような社会的状況に対する敏感な感覚と深い洞察が潜む。それは現代小説であれ伝奇小説であれ、また推理小説であれノン・フィクションであれ、全てに通底する<sup>4)</sup>と分析している。また、川本三郎（1998）は「社会派作家の誕生と軌跡Ⅰ」で、「松本清張の推理小説の魅力は、それまでのトリック重視のゲーム的な推理小説に対し、動機の重要性、犯罪の社会性に注目し、骨太な世界を作り上げていったことにあるだろう<sup>5)</sup>と主張した。成田龍一（2005）は「松本清張と歴史への欲望」で、「松本清張はおおづかみなイメージで言うと、権力悪と組織悪を描き、そこにうごめく人々の欲望に着目して日本社会のありようを描いていく<sup>6)</sup>と指摘した。辻井喬（2010）は、『私の松本清張論—タブーに挑んだ国民作家』という著作で、松本清張の「〈社会派〉という呼称は、社会的な事件を題材としたり作品の舞台として使うからではなく、差別される側に立って人間を描くことが十分に可能な作家だったからである<sup>7)</sup>と強調した。

中国における松本研究とえば、李徳純に「松本清張の創作と芸術性<sup>8)</sup>」、「松本清張論<sup>9)</sup>」などの論文があり、松本清張の日本戦後文学史における地位を

2) 平野謙：『点と線』解説，新潮社，昭和四十六年，P.257

3) 中島河太郎：『松本清張全集 11』解説，文藝春秋，1972年，P.489

4) 浅井清：「松本清張の魅力」、『国文学解釈と鑑賞』第60巻2号，至文堂，1995年，PP.11-12

5) 川本三郎：「社会派作家の誕生と軌跡Ⅰ」、『松本清張記念館図録』，文藝春秋，1998年，PP.54-55

6) 小森陽一・成田龍一：「松本清張と歴史への欲望」、『現代思想』，青土社，2005年3月，PP.66-67

7) 辻井喬：『私の松本清張論—タブーに挑んだ国民作家』，新日本出版社，2010年，P.37

8) 李徳純：〈论松本清张的创作与艺术〉，《外国文学研究》，1989年，PP.42-48

9) 李徳純：〈松本清张论〉，《中国社会科学院研究生院学报》，2001年，PP.87-94

肯定した。また、趙徳遠の「松本清張 — 日本大衆文学の模範」<sup>10)</sup>、秦鋼の「松本清張の『砂の器』と戦後日本社会」<sup>11)</sup>など代表的な研究論文が挙げられる。ほかに、松本清張記念館による松本清張研究奨励事業に、今まで二人の中国人研究者が入選した。それぞれ2004年王成の「松本清張の推理小説と改革開放後の中国」と2009年張雷の「松本清張の小説世界と今の中国社会の類似性について」であった。

以上挙げたように、清張文学の「社会性」をめぐる研究は少なくない。しかし、その研究は徹底しているとは言えない。また、今までの分析は代表作品の『砂の器』、『ゼロの焦点』、『眼の壁』などを中心にするものは多かった。松本清張は初期の作品の中において、社会問題への関心がいかに現されているか、いかに発展していくのか、まだはっきりしていない。そのため、本稿では、これまでの先行研究を踏まえて、両作品における社会性、特に清張の権力悪への暴露を中心に、分析したいと思う。

## 2. 『点と線』から『ある小官僚の抹殺』への発展

清張はタイトルを付けるのがうまくて、『点と線』、『ゼロの焦点』、『砂の器』、『眼の壁』など、一読しただけではあまり意味が分からない抽象的なタイトルが多い。以下、両作品のタイトルの解明、ストーリーの構成、「権力悪」の暴露をめぐる『点と線』から『ある小官僚の抹殺』への発展について分析する。

### 2.1 『点と線』について

『点と線』は、昭和三十二年二月から三十三年一月にかけて、旅行雑誌「旅」に連載された。昭和三十年代に入ること、「神武景気」に入り、社会が安定と大衆化に向かう一方、昭和二十三年に、昭電疑獄事件で芦田内閣が総辞

---

10) 趙徳遠：〈松本清張—日本大衆文学の一面旗帜〉，《教学研究》，1982年，PP.28-33

11) 秦剛：《松本清張的〈砂器〉与战后日本社会》，《日语学习与研究》，2009年，PP.15-

職したのを始め、同二十九年の造船疑獄事件など、汚職、疑獄事件が多発している。松本清張はそれをヒントに、『点と線』を創作したとしている。『点と線』というタイトルについて、清張は「人間というものは、何か一つの点のようなものではないか。この点と点を結びつけている線が、あるいは、親友であり、恋人であり、先輩後輩の関係である。しかし、この線は、あるいは、他人がみてそういう線を設定して引いているのではないか、実際はそうではないが、あたかもそうであるように他人が勝手に線を引いている、という関係もありうると思う」と述べている。また、このタイトルの由来は、テキストの内容からも読み取れる。「佐山とお時とはばらばらな二つの点でした。その点が相寄った状態になっていくのを見て、われわれは間違った線を引いて結んでしまったのです」と書いてある。つまり、もともと関係のない男女という二つの点は、同じ場所で同じ薬を飲んで死んでしまったとしたら、心中と見られるのは常識だが、実は誤って結ばれてしまった線なのである。この線によって、『点と線』の物語が始まっている。

『点と線』のストーリーの展開はほとんど事件発生の時間順に沿い、最初に登場してきたのは機械工具商の安田辰郎である。この安田は料亭の二人の女中と東京駅13番ホームで「偶然」、15番ホームにいる女中のお時と一人の若い男佐山が見えた。しかし一週間後に、この若い男女の死体が博多に近い香椎海岸で発見された。福岡署の鳥飼刑事が、「情死」に疑問を抱き、汚職事件を調べる東京警視庁の三原警部補と一緒に安田に対するアリバイ崩しに奔走し、つまり線から点へ還元するよう、真相の追及に苦心した。結果は汚職事件が上層部に波及しないよう、二人を毒殺し、時刻表を駆使して、列車、飛行機などで巧みにアリバイ工作をする安田夫妻の犯行によるものだということが分かった。また、『点と線』が『旅』という雑誌に連載されたのが最初で、地理から見れば、清張は見事な想像力と推理力を運用し、博多から東京、また札幌へ、ばらばらになっている地名や駅名といった「点」を、少しずつ組み立てて、国鉄さらに当時運航したばかりの空路によって、日本列島を貫く幾多の「線」に結んでいる。作者が読者に図上旅行をさせたいという意図が覗かれる。

『点と線』の主眼は、いわば不可能に挑みかかるその「アリバイ破り」のおもしろさにかかっている<sup>12)</sup>と平野謙は指摘している。また、『ミステリー最高傑作はこれだ！一図説ダイジェスト』において、『点と線』に関するものが次のように述べられている。

作品が書かれた当時はまだ新幹線が開業しておらず、飛行機の利用も一般的ではなかったため、日本国内の旅行・移動には、相当遠距離でも鉄道（主に急行列車）が用いられていたこと等、当時の社会状況が反映された内容になっている<sup>13)</sup>。

松本鶴雄は『点と線』論で、「このようなアリバイ崩しの手続きに沿って、作品世界は展開する。つまりアリバイ崩し型の、我が国最初の推理小説の典型が、この『点と線』である<sup>14)</sup>と主張している。

## 2.2 『点と線』の不足

『点と線』が発表されて以来、大好評になっている。この新しさは、すなわち戦前の探偵小説が取り上げることのできなかった汚職というこれまでにない犯罪を導入したという点にある。

松本清張はこの『点と線』を通して、日本の伝統的な探偵小説の謎解きとトリック設置だけを専念する局面を打破し、犯罪動機を重視し、さらに犯罪動機を個人から社会へと押し広げた。また、当時の日本文壇の現状と関連して見ると、さらに理解できる。明治以後の日本文学は政府、思想警察に厳しく検閲されていて、社会の矛盾を書くことは許されなかった。自然主義文学は日本に土着して以来、「私小説」といった純文学が文壇の主流を占めている。そのため、当時の汚職問題を表に出すのは読者にとってごく新鮮なもので、「社会派推理小説の記念碑的な作品」まで位置づけられたわけである。

---

12) 平野謙：『点と線』解説，新潮社，昭和四十六年，P.258

13) 中川右介：『ミステリー最高傑作はこれだ！一図説ダイジェスト』，青春出版社，2004年，P.83

14) 松本鶴雄：『点と線』論，『国文学解釈と鑑賞』第60巻2号，至文堂，1995年，P.63

しかし、今の時代になって、もう一度テキストを読み直すと、やはり社会問題の深い追及に欠けているという感じがする。具体的に言えば、汚職事件に、政治、行政（官僚）、業者（企業）がいかに関わり合っているか、組織の上層にいる権力者がいかに利益の同盟を組んでいるか、課長補佐の佐山が最後の「情死」に至るまで、どのような経緯があったのか、テキストにほとんど書かれていない。もちろん、小官僚を「死」に追い詰める資本主義の本質にも触れていない。

この点について、藤井淑禎がこう指摘している。

『点と線』の不足部分とは、渦中の小官僚が死に至るまでの内面の推移のことだが、(略)『ある小官僚の抹殺』になると、(略)肝腎の『悲劇』の内側部分に関しては、依然として、十分には描かれていないように思う<sup>15)</sup>。

一方、細谷正充は次のように分析している。

清張自身は、こうした自殺へと至る下級官僚の心理を拒絶している。それは西に自殺をほのめかされた倉橋課長補佐（『中央流沙』の登場人物：筆者注）が、これをきっぱりと断る場面からも明らかであろう。さらにいえば『中央流沙』『ある小官僚の抹殺』あるいは『点と線』でも、官僚の死を、自殺に見せかけた殺人としているのではないか。物語を通じて、官僚の自殺を否定しているのだ。そこに清張の、強い意思表示を感じる<sup>16)</sup>。

藤井と細谷はまさに正反対の意見を持っている。藤井は小官僚の心理推移に関する描写が欠落していると主張しているが、細谷は作者自身が心理描写を拒絶すると述べている。しかし、松本清張の各ジャンルの作品を見ると、詳しい心理描写がそんなに多くないことが分かる。これが藤井が指摘した「不足部分」ではなく、清張ならではの創作特徴だと考えられる。また、細谷の作者の心理拒絶によって官僚の自殺を否定するという見方にも賛成しかねる。清張は事件の展開、人物の移動などを通して、裏に隠されている真相を客観的に読者

15) 藤井淑禎：『清張 闘う作家—「文学」を超えて』、ミネルヴァ書房、2007年、P.148

16) 細谷正充：『松本清張を読む』、ベスト新書、2005年、P.167

の前に示すため、登場人物の心理描写に重点を置かないのである。

まとめて言うと、『点と線』は清張の官庁汚職事件に目を向ける発端となる作品だが、まだ汚職の内実には切り込んでいない。むしろ、推理がうまい清張は「課長補佐」という肩書きを借りるだけで、仮にほかの職業の人物を設定しても、『点と線』というミステリー小説の面白さを損することはないのであろう。汚職事件もここでは作品の背景に後退してしまうのである。この意味では、この作品から現れた社会性が希薄である。『点と線』に対して、その次の年、昭和三十三年に発表された『ある小官僚の抹殺』は、タイトルから内容に至るまで、徹底的に「権力悪」というテーマを追及した。

## 2.3 『ある小官僚の抹殺』への発展

『点と線』の連載が終わった翌月、『ある小官僚の抹殺』が発表された。先に分析した『点と線』の不足点はどのように変化していくのか、次の二つの面に分けて、検討したいと思う。

### 2.3.1 社会問題をもっと深刻に追及する面

上述したように、『点と線』は汚職問題を追及しているが、不徹底だった。清張がもっと力を入れたのは、有名な東京駅ホームでの四分間のトリックで、鉄道や航空機を組み合わせた安田のアリバイ作りのほうだ。したがって、『点と線』から現れた社会性が希薄である。清張自身はこの点に気づいたかもしれない。その補充として、『ある小官僚の抹殺』の創作が始まったと考えてもいい。なぜなら、まず、発表順を見たら、『点と線』は、「旅」に連載されたのは、昭和三十二年二月から三十三年一月にかけてだが、『ある小官僚の抹殺』は『別冊文藝春秋』に掲載されたのは三十三年二月だということが分かった。つまり、清張は『点と線』の創作中、頭の中で、もうすでに『ある小官僚の抹殺』の構図を立てていることが想像できる。また、内容から見ると、両作品とも汚職事件の渦中にある小官僚が、権力悪のせいで、犠牲になってしまうストーリーである。そのうえ、テキストにおける具体的な描写も似ているところが多い。

『ある小官僚の抹殺』はより直接的に、はっきりと渦中の小官僚が死に至るまでの経緯を描きだされた。砂糖の輸入割り当てをめぐる、業界の幹部が政治家に贈賄し、下級官吏の地位にある唐津課長がその仲立ちをした。この砂糖事件の鍵を握る唐津課長が、京都への出張の途中熱海の旅館で自殺した。不審な状況から警察は他殺の線で動くものの、事件として立証できず、汚職の摘発も失敗に終わる。この小官僚の自殺が「上役に迷惑をかけない」と世間では見られている。ところが、清張はこの点に疑問を抱き、官僚機構内部の黒い霧にメスを入れようとする。これが清張の分身である「私」の行動によって表れている。「私」は、実地検分をして、唐津課長の死は、自殺に見せかけた殺人ではないかと推理する。つまり、官僚機構の上層部は自分の地位、利益を守るため、汚職の真相がバレないように、下層の課長級の人々を犠牲にし、「自殺」させてしまったのである。作者は作品の最後に、「彼らは、いつも風に吹かれてそよんでいる弱い草である」と評して、この作品を締めくくっている。まとめると、『ある小官僚の抹殺』の汚職事件に関する描写は、『点と線』に比べて格段に詳しい。事件の全容やそれへの唐津の関与が、諸証言によって詳しく説明されている。

### 2.3.2 両作品のジャンル別という面

『ある小官僚の抹殺』のタイトルは『点と線』のような抽象的なものと違い、はっきりしている。一人の小官僚がある事件で抹殺され、消えてしまうというストーリーのテーマは一目瞭然である。タイトルだけでなく、ストーリーの構成から見ても、『点と線』とかなり違っている。

『ある小官僚の抹殺』は全八章の構成になっている。前半の第一章から第五章までは、ノンフィクションのような内容で、密告電話をきっかけにして汚職事件の捜査が進められていく過程が書かれている。後半の三章では、時期設定をそれから数年後とし、清張の分身とも言える「私」を登場させ、この事件のデータを集めたり、現場の旅館を訪ねさせたりして、唐津課長が自殺ではないと推理している。なぜ松本清張は『点と線』の創作直後、それとまったく違う

ジャンルの『ある小官僚の抹殺』を書いたのであろうか。

「内容は時代の反映や思想の照射を受けて変貌を遂げてゆく」<sup>17)</sup>と清張は主張している。すなわち、作者は主題によって形式を決定し、表現の方法を考えている。「ただこの題名はすこし正直すぎて、ネタを割りそうな危険さもある。もっとも著者は『ある小官僚の抹殺』を推理小説のつもりでは書かなかったのかもしれない」<sup>18)</sup>と平野謙はすでに指摘している。また、藤井淑禎は「『ある小官僚の抹殺』という作品がやはり小説性とノンフィクション性とをあわせもった、あるいは二つの方向に引き裂かれた作品である」<sup>19)</sup>と分析している。これについて、松本清張自身はこう述べた。

私の小説に『或る小官僚の抹殺』というのがある。これは実際にあった事件をモチーフとして書いたもので、内容は、若干の空想を入れただけで、ほとんど当時の記録に拠っている。昭和二十八年の春、ドミニカ輸入砂糖の割当問題に絡んだ汚職が起って当時の農林省食糧庁業務第二部食品課長長沢武氏（当時42歳）が自殺した<sup>20)</sup>。

清張自身の話によって、テキストの内容が記録（ノンフィクション）の上に、空想（フィクション）も入れられていることが分かる。藤井氏の分析によってみえてくるのは、前半と後半の構成が「ノンフィクション」と「小説」の分裂だ。しかし、よく考えてみると、もし作品全体をすべて「ノンフィクション」の形を取って書いたら、データの足りなさのせいで、「自殺説」か、「他殺説」か、どっちも説得力が足りない。結局、この砂糖事件自身と同じように、真相が究明できないリスクが高い。これが作品としては不完全だといえる。一方、後半（第6章～第8章）の「私」の調査と分析（フィクション）によって、教唆者の篠田の意図と行動がだんだんはっきりしてきた。さらに、旅館の扉の「鍵」の発見が、「他殺」の可能性を一層高めたのである。したがって、この

---

17) 『松本清張記念館図録』、文藝春秋、1998年、P.5

18) 平野謙：『駅路松本清張短編集（六）』解説、新潮社、昭和四十年、P.465

19) 藤井淑禎：『清張闘う作家—「文学」を超えて』、ミネルヴァ書房、2007年、PP.163-164

20) 松本清張：「汚職の中の女」、『松本清張社会評論集』、講談社、昭和五十四年、P.16

作品の後半は、「分裂」ではなく、一種の「補足」のような内容で、構成上で、欠かせない部分になっている。さらに言うと、これが清張のそのあとの『日本の黒い霧』、『現代官僚論』といったノンフィクション系列の創作の前奏で、一種の試みだと考えられる。

### 3. 「社会悪」の暴露について

社会性について、清張自身は「推理小説の読者」で、「私は、動機にさらに社会性が加わることが主張したい。そうなると、推理小説もずっと幅ができ、深みを加え、時には問題を提出できるのではなかろうか」<sup>21)</sup>と述べている。社会事件、社会問題に目を向ける清張の創作態度は、近代以来、日本文壇を占拠した作家個人の生活体験、その心境や感慨を吐露した私小説家たちと全く違っている。松本清張は戦後の日本社会を背景に、一見裕福な道を歩んでいる社会に隠された個人の欲望、社会全体の不安、さらに国家の歪みを鋭く抉り出し、その人間性と社会の暗黒を読者の目の前に展開し、当時日本社会の諸問題を暴露したのである。

小林慎也（2006）は「点と線 鉄道トリックの先駆的作品」で、こう述べている。

戦後、造船、疑獄などの汚職、疑獄事件が相次ぐ。政界、官界、業界三つの癒着が取り沙汰されながら、巨悪は逃げ延びる。犠牲になるのは、中間の管理職。そうした、複雑な社会機構が生み出した構造的な犯罪に巻き込まれた個人の悲劇。（略）作家はその後も『ある小官僚の抹殺』を書き、ノンフィクション『日本の黒い霧』に取り組む<sup>22)</sup>。

21) 松本清張：『松本清張全集 21』、文藝春秋、1973年、P.44

22) 小林慎也：「点と線 鉄道トリックの先駆的作品」、『松本清張昭和と生きた、最後の文豪』、平凡社、2006年、P.46

清張は「文学はすなわち暴露」といったことがあり、「権力悪」に対する批判を、すでにフィクションの作品に表した。これが、昭和三十二年のミステリー小説『点と線』からはっきり読み取れる。そのあと、『ある小官僚の抹殺』（昭和三十三年）、『危険な斜面』（三十四年）、『三峡の章』（三十五年～三十六年）、『中央流沙』（四十年）などが次々と発表され、組織の中で翻弄される小官僚たちの運命が書かれている。官僚の問題点に目を向けた清張は、やがて文部・農林・検察・通産・警察・内閣調査室の六つの中央官庁に切り込んだノンフィクション『現代官僚論』を世に問うのである。なぜノンフィクションの手法を使ったかという、清張のこの話を読めば分かると思う。「小説で書く、そこには多少のフィクションを入れなければならない。しかし、それでは、読者は、実際のデータとフィクションとの区別がつかなくなってしまう。つまり、なまじっかフィクションを入れることによって客観的な事実が混同され、真実が弱められるのである」<sup>23)</sup>（『なぜ「日本の黒い霧」を書いたか』）。したがって、清張はたくさんの資料収集、綿密な現地調査、冷静なデータ分析などによって、『現代官僚論』にまとめたのである。このような事件の裏で権力がいかに関与しているか、その目的が何だろうか、日本社会の発展にどんな影響を与えるかといった時代問題を提出し、人々に思考させるのである。

この点は、『ある小官僚の抹殺』、『現代官僚論』のテーマにも共通していて、清張の人間存在を求め続ける姿が見られる。つまり、権力の力が大きくなる一方、個人、団体が次第に歯車化していく。「ひとりの小官僚を抹殺すれば、汚職事件そのものがツブれるという犯罪の動機の非情な組織的な要因がここに語られているわけである」<sup>24)</sup>。なぜ小官僚たちは犠牲になったのか。『ある小官僚の抹殺』のテキストでこう書いている。

---

23) 松本清張：「なぜ『日本の黒い霧』を書いたか」、『日本の黒い霧（下）』、文藝春秋、2004年、P.388

24) 平野謙：『駅路松本清張短編集（六）』解説、新潮社、昭和四十年、P.465

これまでの疑獄事件の途中で、真相を握る課長クラスの自殺の例が何度かあるからだった。(略) いずれも実務には練達者であり、事件の鍵をにぎる人びとであった。その死によって事件は発展し得ずに、雲散霧消している<sup>25)</sup>。

このように、下層部の小官僚の死によって、事件は解決されないまま、上層部の人は責任から逃れてしまっている。

#### 4. 「社会悪」を追及する原因

清張の作品に登場するこのような小官僚たちは、実は役人の大部分を占め、実務のほとんどを担当している。しかし、彼らは学歴がない、或いは、いい学歴がないため、「兵隊」とか「無資格者」とか呼ばれて、出世コースから外されている。これらの小官僚に、清張は自分の人生体験を映している。

松本清張は家が貧しかったために小学校だけの学歴しかなく、成年後、家族の重荷が彼一人の肩にのしかかってきた。高等小学校を終えた後、給仕として川北電気株式会社小倉出張所に勤めるのだが、三年後失業し、新聞記者に憧れていた彼は低学歴で新聞社に拒否され、大家族を養うために、簿の仲買などのアルバイトをしたこともある。日本近現代文壇のエリート出身の作家たちに比べて、清張の履歴はあまりにもみすぼらしいと言える。彼は名が売れる前社会の最下層で喘ぎながらも、暮らしを立てるように駆け回っていた。そのため、下積みの哀歓がしみじみと感じられ、自分の作品に不遇な人物の肩を入れている。

『点と線』において、このような学歴に関する描写がある。

課長補佐というのは、長年その仕事をやっているからあらゆることに詳しい。まあ、年季を入れた職人のようなものだ。そのかわり、出世は頭打ちだがね。後輩の大学出の有資格者が自分を追い越してゆくのを見ているだけだ。本人もあきらめている。内心の憤懣はあろうが、そんなことをいちいち顔に出しては役所勤めはできない<sup>26)</sup>。

---

25) 松本清張：「ある小官僚の抹殺」、『駅路松本清張短編集（六）』、新潮社、昭和四十年、P.118

26) 松本清張：『点と線』、新潮社、昭和四十六年、P.199

また、『ある小官僚の抹殺』においては、

いったい、課長補佐というのは、さしたる学校も出ず、長年、役所に勤めて四十歳以上になった実務の練達者が多い。この人たちはどちらかという、停年退職してその退職金や恩給の計算をたのしむといった地道な性質であろう。いわば、『出世』にはすでに望みを絶った人たちである<sup>27)</sup>。

という似ている内容が書かれている。ほかに、『学歴の克服』というエッセイには清張は学歴による差別の経験を書いた。

社長がいたが、私の学歴を聞いて失笑した。それから新聞記者になるには大学卒業の資格があって優秀でなければならないことを教えた。二十一歳であった。私の大学卒業者への劣等感は決定的となった<sup>28)</sup>。

学歴が高くない松本清張は、よく差別待遇を受けている。それゆえ、彼は社会下層の人々、不遇の人々に関心を持ち、社会悪を暴露しつづけている。このような社会権威への暴露と憤慨が、清張文学に随所に見られる。それは作家が長年にわたり、苦しい環境の中でもがき、社会の不公平への不満と憤りの表れである。尾崎秀樹がかつてこう指摘している。

貧しく打ちびしがれている庶民への共感、反権力的な視点と社会を動かすさまざまな力の暗い闇の部分への旺盛な好奇心、そして、日本の伝統的な私小説を拒否し、フィクションの面白さを強調する小説観、当時に隠された真実への追及するノンフィクションへの強烈な関心。これらの松本清張の文学的特徴は、氏の苛酷な人生体験から生まれたのである<sup>29)</sup>。

---

27) 松本清張：『駅路松本清張短編集（六）』、新潮社、昭和四十年、P.133

28) 松本清張：『松本清張全集34半生の記・ハノイで見たこと・エッセイより』、文藝春秋、1972年、P.216

29) 尾崎秀樹・権田萬治：「松本清張・新潮日本アルバム」、新潮社、1994年、P.4

松本清張が小説を書き始めたのはすでに40歳過ぎていた。作家として独立の生活を持つようになったのは50歳近くになっている。また学歴のせいで、当時の主流文壇からも孤立されている。このような厳しい人生体験が、清張の文学修業にもなり、また社会と人間を見る眼を磨いたのである。清張は作品において、社会の下層で生活に喘いでいる人間像と社会現実をリアルに描き出し、それを通じて、個人から社会全体までの欲望、不安、差別、不公平などの暗い面を暴き出した。

## 終わりに

松本清張は1951年文壇に登場する頃から、1992年に亡くなるまでの40年間の作家生活において、1000部を超える作品をこの世に残した。彼は鋭い目で戦後のさまざまな社会問題をいち早く発見し、自分の作品を通して暴露している。初期作品の『点と線』、『ある小官僚の抹殺』において、松本清張は汚職追及の過程から生まれる小官僚の自殺者というユニークな角度から、官僚主義の弊害に迫っている。彼はつねに権力構造のタブーに挑み、その推理は迫力に満ちている。それは今日でも読者の共感を呼んでいる。

『点と線』はかつてから、「社会派推理小説の記念碑的な作品」と高く評価されているが、本稿の分析により、社会悪の暴露という面において、まだ不徹底だということが分かった。『点と線』は、松本清張の戦後の日本官僚に注目し始める作品だといったほうが適切だと考えられる。その次の年に発表された『ある小官僚の抹殺』は社会問題の追及という面で、『点と線』より大きく発展している。本稿は『点と線』、『ある小官僚の抹殺』という両作品を研究対象にし、そこに表れる社会性をめぐり、タイトル、構成、ジャンル、暴露の程度などに分けて分析してみた。その上、作者の「社会悪」への追及と理由も説明した。しかし、この両作品における時代背景や清張の純文学から大衆文学特に推理小説の領域に乗り出した理由などについて、まだ分析していない。これからの課題として、もっと深く検討していこうと思う。

### 参考文献

1. 松本清張：『駅路松本清張短編集（六）』，新潮社，昭和四十年
2. 松本清張：『点と線』，新潮社，昭和四十六年
3. 松本清張：『松本清張社会評論集』，講談社，昭和五十四年
4. 尾崎秀樹・権田萬治：「松本清張・新潮日本アルバム」，新潮社，1994年
5. 『国文学解釈と鑑賞』第60巻2号，至文堂，1995年
6. 『松本清張記念館図録』，文藝春秋，1998年
7. 『松本清張事典』，歴史と文学の会，勉誠出版，平成十年
8. 井上ひさし・小森陽一：『座談会昭和文学史第三巻』，集英社，2003年
9. 『現代思想』，青土社，2005年3月
10. 細谷正充：『松本清張を読む』，ベスト新書，2005年
11. 湯原公浩：『松本清張昭和と生きた，最後の文豪』，平凡社，2006年
12. 藤井淑禎：『清張闘う作家—「文学」を超えて』，ミネルヴァ書房，2007年
13. 『松本清張の世界“清張文学”の真髄に迫る徹底考察』，宝島社，2009年
14. 権田萬治：『松本清張時代の闇を見つめた作家』，文藝春秋，2009年
15. 辻井喬：『私の松本清張論—タブーに挑んだ国民作家』，新日本出版社，2010年